

## 1. やさいタクシーの概要

## (1) やさいタクシーとは

利用客とともに「乗合タクシーに荷物（野菜や加工品等）を積載し、物産館まで運ぶ仕組み」であり、試験運行では「鶴田線」、「神子線」の乗合タクシーを利用し、自慢館（鶴田地区内の物産館）まで荷物を運搬する運行を実施した。

## ■ 「やさいタクシー」の詳細

- ・「会員（出荷者）」が利用。事前予約制（タクシーへ電話）
- ・1日1便（平日：月・水・金）
- ・「運賃\*」を支払い、自慢館へ「荷物（農産物等）」を運搬  
※試験運行時は「無料」
- ・運賃1回分で運ぶ量は「ミカン箱」程度。
- ・荷物と一緒に「利用客」も同乗。



## (2) 試験運行の内容

- 運行期間（1月下旬～2月上旬）

平成30年1月22日（月）～2月9日（金） 平日：月曜・水曜・金曜のみ運行

- 利用人数 試験運行時は「3名」募集
- 事前予約の方法 前日までに、運行事業者（鶴田タクシー）に電話
- 運行時間（午前7：30～8：30）

自慢館に午前8：30頃に到着

- 運賃 試験運行中は「無料」
- その他

運べる荷物は「自慢館で販売する野菜や加工品」のみ。

運搬用の「バッグ（画像）」を貸出し。

荷物と一緒に「一般の利用客（乗客）」も同乗。



横45×奥行30×深さ30cm

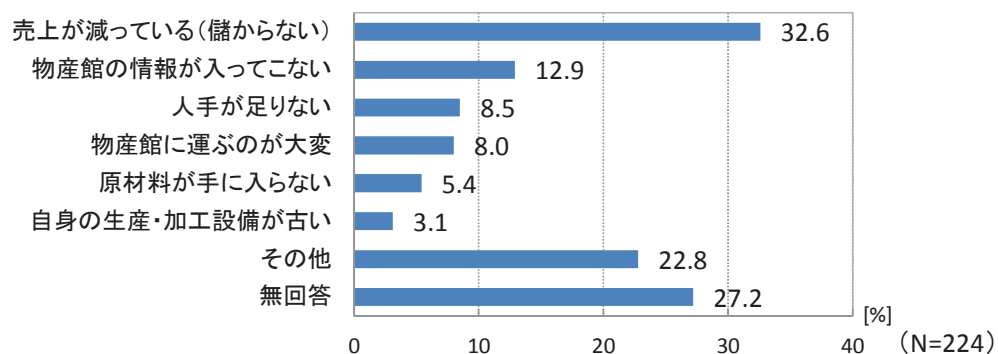
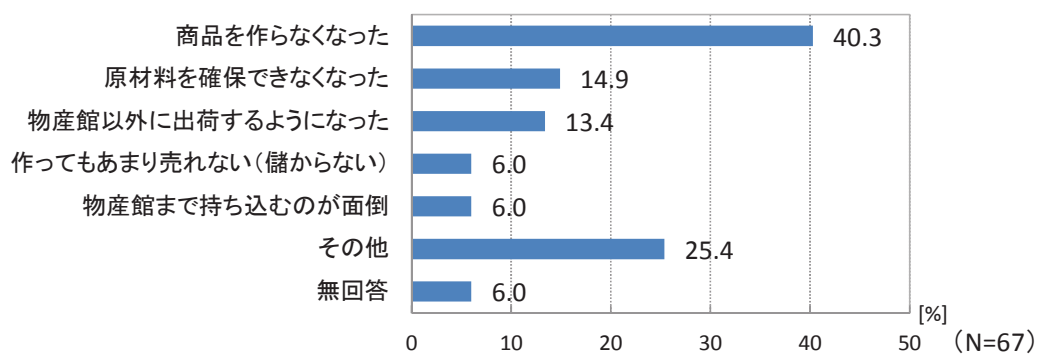
# 第Ⅵ章 やさいタクシーの試験運行

## 2. やさいタクシーの背景

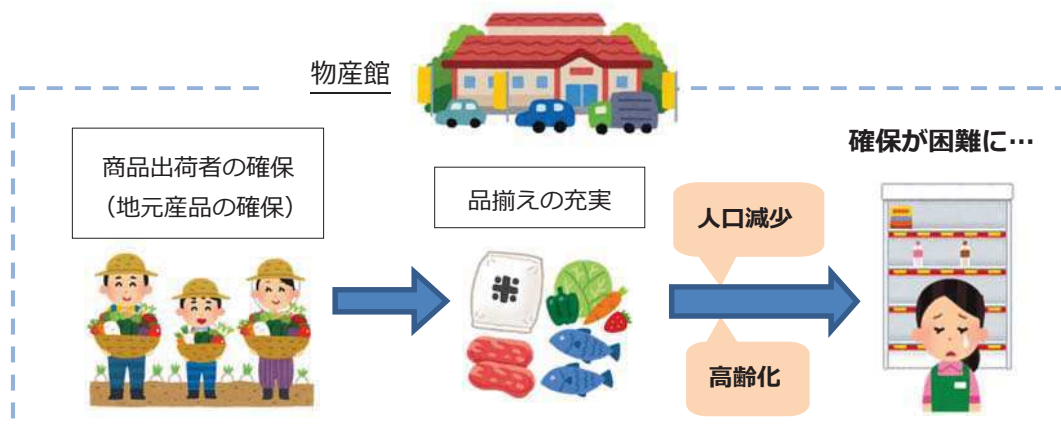
### (1) 物産館魅力向上プロジェクト

平成 29 年度、国の事業で実施した「さつま町物産館魅力向上プロジェクト」における物産館加入者（出荷者）へのアンケートのなかで「出荷をしなくなった理由」として、「物産館まで持ち込むのが面倒」との回答が挙げられている。

また、「出荷をしていて困っていること」についても、同様に「物産館に運ぶのが大変」が回答として挙げられている。



また、特に過疎地域において、買い物施設が減少しているなか、物産館は地域住民が生活必需品を買い揃える「生活インフラ」を担っている一方、さつま町を含め、多くの物産館において、出荷者の高齢化が進んでおり、今後、出荷量を確保することが困難になっていくものと懸念されている。



# 第Ⅵ章 やさいタクシーの試験運行

## 3. 試験運行の結果

### (1) 利用実績（公募3名）

①運行日数 ※デマンド交通のため、利用（予約）がない日は運行しない。

7日間（利用可能日数：9日間のうち）

②利用回数

延べ13回（利用可能回数：27回のうち）、利用率：48.5%

1人当りの利用回数：4.3回/人

③運搬した商品の価格

総額：33,280円/13回

1回当りの商品総額：2,560円/回

④運搬した商品の種類 ※時期的に野菜の栽培量は少なく、根菜類が中心となっている。

じゃがいも：120袋（10回）、ニンジン：42袋（4回）、大根：37本（3回）

ホウレンソウ：19束（2回）、里芋：24袋（2回）

### (2) 感想 ～ 自慢館館長へのヒアリング結果

①やさいタクシーの需要について

- ・出荷者、物産館ともに需要があり、今後は、さらに需要が伸びると思われる。
- ・今回は時期的にも野菜の栽培量（出荷量）が少なかったが、出荷者に周知すれば、運行に合わせて栽培量を増やす（または栽培を始める）出荷者も出てくると思う。

②運賃について

- ・運賃を「有料（想定100円）」にしたとしても、出荷額から考えて問題ないと思う。

③課題について

- ・課題として、商品の価格設定の問題がある。

商品の価格は、他の出荷者の価格を参考に付けることも多く、その日の同種の商品の価格を確認せずに値付けした場合、相場から外れた価格を付けてしまい、結果として商品が売れないケースが発生することが考えられ、実際、今回の試験運行も、同様のケースが発生し、再度、出荷者了承のもと、物産館側で値付けしたケースもあった。



4. 参考資料：西日本新聞（1月28日朝刊）

# タクシー野菜も相乗り

鹿児島・さつま町



「やさしいタクシー」の運転手にニンジンやジャガイモを詰めたバッグを渡す湯田さん（右）  
 24日、鹿児島県さつま町

## 高齢農家の出荷代行 過疎地域の足も確保

乗り合いタクシーに野菜も相乗り。鹿児島県さつま町は交通弱者対策として運行する乗り合いタクシーで農家の野菜を直売所に出荷代行する「やさしいタクシー」の試験運行を始めた。トランクに野菜を載せ、人と一緒に運ぶ「貨客混載」の仕組み。自治体主体で、地域の足を確保しつつ、高齢農家の負担を減らして直売所の品ぞろえも維持する珍しい取り組み。町は10月の本格導入を目指す。

県北部に位置するさつま町は人口約2万2千人。高齢化率は4割近い。町は2011年から地元タクシー会社に委託し、交通手段がなく通院や買い物に困難な高齢者向けの予約制乗り合いタクシー（6路線）を



大人1回2000円で運行中。

試験運行は同町鶴田地区の2路線で、22日から3月9日まで週3日実施。人の送迎の途中で、予約を受けた農家から野菜も集め、最後に路線外の直売所「自慢館」

まで野菜を運ぶ。ニンジンなどの出荷を頼んだ湯田隆義さん(84)は普段、直売所まで約8キロを自ら運転するが、高齢のため、先々は運転免許の返納も考えている。「出荷できない場合は農作業のやりがいを失う。代行は助かる」と語る。

自慢館によると、同地区で出荷する会員は約190人。5年前から約30人減った。新鮮な地元野菜が売り手だけに担当者は「運ぶ手段があれば農家のやる気を保ち、生産者の掘り起こしにもつながる」。町内のかの直売所も同じ課題を抱えており、町は10月から町全体に拡大。集荷料金は1回1000円程度を見込む。

国土交通省貨物課の担当者は「自治体の乗り合いタ

## 「貨客混載」全国で拡大

過疎地の交通インフラの課題について、人とモノを一緒に運ぶ「貨客混載」で解決しようとする取り組みは全国で広がっている。宮崎交通（宮崎市）は2015年からヤマト運輸と連携し、路線バスに宅配便の荷物を積んで輸送するサービスを始めた。現在、乗車率の低い宮崎県西都市・西米良村間など3路線で実施し

ており、宮崎交通の担当者は「荷物の輸送料を得て、地域の足である路線バスを存続できている」と話す。

京都府は2月にも、タクシーの営業所がない南山城村で住民の足確保の取り組みを試行する。借り上げたタクシー1台が村内に常駐。人の送迎のほか買い物代行や荷物の輸送など複数

の依頼を掛け持ちする。

「過疎地で宅配や送迎を別々に行うのは非効率。需要を見ながらいかに一体運用できるか見極めたい」と担当者は語る。

国も「貨客混載」の規制緩和に乗り出した。現行でも乗り合いタクシーや路線バスは一定基準内で荷物輸送が可能だが、通常のタクシーや貸し切りバスは運べず、トラックの人員輸送も

禁止していた。これを昨年9月から過疎地限定で解禁。許可を取れば人とモノ双方を運べるようになった。

全国の許可第1号となった岡山県矢掛町のタクシー会社は6月にも、農家がグループごとに集めた野菜をタクシーで直売所に運ぶ事業を始める。同社専務は「動ける高齢者も交通手段がないと元気を失い地域の活力も奪われる。過疎地の足を支える仕組みはこれから広がるはずだ」という。

（一ノ宮史成）